

第13回ちばてっく会報

Chiba Teaching English to Children

“ちばてっく”は児童英語教育をみんなで考え、意見交換を行い、研鑽していく会です。

今年も大変多くの方に参加していただきました。

(1) 探究活動とテレビ電話を取り入れたプロジェクト型の外国語活動

館山市立北条小学校 大山友子先生

初めに、昨年度長期研修生として西垣先生の研究室に所属していた大山先生に、小学校における外国語活動の実践についてお話ししていただきました。

【今回のテーマ設定の背景】

外国語活動の指導を通して、児童たちのリスニング力の成長を間近で感じながらも、せっかく学習しても実際に使える場所がないと感じていたそうです。教師主導の場面設定では児童への動機づけが弱いとして、今回はテレビ電話であるスカイプを6年生のクラスに導入しました。

【実践の内容】

「場」の設定、「言ってみよう」を現実にするという目標を立てて、今回は、「プロジェクト型の英語活動において、テレビ電話を取り入れ、探究的・協同的な学習を行えば、児童の学習意欲が高まり、発信力(使える英語力)が養成できるであろう。」を研究仮説として立てています。

児童が話す内容は、6年生が学校の最後の卒業生になるという理由から、児童の希望の多かった「学校の紹介」に設定したそうです。スカイプをする相手は、ALTの母・日本人学校教諭・インドネシア人女性で、児童全員と話し合う形になるように、プロジェクターに相手の映像を映して、会話を行いました。スカイプの特徴としては、言葉で伝えることが難しい単語や表現などを、絵や写真を映すことで伝えることができるという点で、コミュニケーションに役立ったそうです。

結果としては、習ったフレーズの定着率がよく、児童の授業に対する反応はとてもよいものだったそうです。英語活動は楽しければいいというのではなく、目的意識がしっかりしていれば、よい授業になると先生はおっしゃっていて、目的を明白にした授業づくりが大切であるのだと強調されていました。

【課題】

スカイプの相手を探すことが難しいこと、学校のパソコンにダウンロードするときには手続きが大変なこと、パソコンも機械なので故障時などのトラブルが発生する恐れがあることなどを挙げていました。他には、順番待ちになる児童への配慮はどうするか、パソコン上の問題などがあります。音声の不調のときは、筆談で対応したこともあるそうです。臨機応変な対応はどこでも必要ですね。

【まとめ】

大山先生は最後に、指導者からの一方的な知識の詰め込みではなく、子どもの探究の姿勢を作ってあげることが大事だとおっしゃっていました。今回では、自分たちが紹介したい内容を扱ったことで、「伝えたい」という気持ちがこもっていたような気がします。そして、伝えることは、「自分の学校」と他は違うことを知ることにもつながりました。コミュニケーションとは、相手を知るだけではなくて、自分を知ることにもつながるのですね。



(2) タイ学校視察報告 —タイ学校教育の傾向—

あぜりあ・らんぐえーじ・すくーる 代表 勝山 ひとみ先生

勝山先生にはタイの私立学校とインターナショナルスクールの視察をふまえて、お話していただきました。



【タイの教育】

1875年に寺院を学校として活用することを国家の教育方針として、1921年には初等教育法において7~14歳までの心身健康なすべての児童に、男子5年、女子3年の初等教育無償が義務化されました。1990年代に前期中等教育の無償義務化がなされ、39.8%だった中学校の就学率が1997年には75.8%にまで伸び、1999年の新国家教育法においては、タイの宗教・文化・知恵の強化やすべての子どもに最低12年の基礎教育を与えること等が定められました。現在の教育制度は幼稚園が3年、小学校が6年、中学・高校が3年ずつで大学が4年となっていて、公立学校のほかに私立の学校とインターナショナルスクールがあります。

【タイの学校視察より】

勝山先生が訪問された Udomsuksa School と Ramkhamhaeng Advent International School の2つの学校についての報告がありました。

①Udomsuksa School (私立学校)

創立1945年、生徒数3000人の大きな学校で、幼稚園から高校までの15年間で教育がなされます。生徒の90%が大学進学希望で、シラバスは国のものを採用しています。この学校では Thai Program, Future Program, Advance Future Program, English Program の4つのプログラムの選択が可能で、これらは英語の時間数が異なり、また教師も Thai Program ではタイ人教師による英語の授業がネイティブの教師より多いのに対し、English Program では70%の授業がネイティブによって行われているそうです。

②Ramkhamhaeng Advent International School (インターナショナルスクール)

設立が1999年で、2歳児の保育園から高校生までの700人が在学し、生徒の半分以上がタイ人、30%が韓国人で残りはその他の国の人である。アメリカのカリキュラムを採用しており、年少から週3時間のネイティブの英語クラスが始まる。卒業生の100%が大学進学していて、そのうちの75%がタイの大学、25%が外国の大学です。

【今後のタイの教育】

タイではこの5年で英語が重視されてきて、2010年には英語が公用語になりかけ、教育省では英語を教育上の第2言語に宣言しました。また、学期を9月始まりにすることを検討し、2015年のASEAN共同構想に向け、すべての若者・児童が英語の能力を備えることを目指しています。このようなタイの取り組みから、日本も遅れを取らないよう英語教育を充実させることが重要であると勝山先生はおっしゃっていました。

(3) Slow but Sure —子どもから学んだ指導法と効果があった活動例—

EFL Arena 主宰 菊池 優子先生

児童英語ワークショップを主宰されている菊池優子先生からお話を伺いました。今回はそこでの活動を通して子どもから学んだことや、効果があった活動例についてお話しをしていただきました。



【子どもから学んだこと】

子どもが考えていることにはまだまだ私たちがわからないことがたくさんあります。たとえば、here という語を「ヒュー」と発音していたときは、子どもは耳から学ぶのが得意だからすぐに英語の音が出てくるはずという思い込みが間違っていたことを実感されたそうです。子どもたちの耳慣れない音の発音を求められると、別の音で代用してしまうこともあるのですね。

また、「子どもの指導」とひとくくりに考えることには危険がはらんでいると菊池先生は考えていました。それは、そのように考えることで子どもそれぞれの発達段階にあった指導法を考えなくなってしまうからです。一人ひとりに何が必要で、何をしてあげることがいいのかをしっかりと考える必要がありますね。

そして、菊池先生は「子どもの英語指導は英語だけ教えていればよいというわけではない。」とおっしゃっていました。子どもは楽しくないと友だちとの約束や遊びを優先させる。高学年は進歩の実感がないと継続して通ってきません。保護者の方は学習の成果が明確でないと不安になります。英語を教えるうえで、子ども・保護者どちらもが満足するような内容にすることは、工夫が必要です。工夫の一つに他教科からネタを仕入れる方法を挙げられていましたが、小学校の先生は他教科も受け持っていることから、小学校の先生はうらやましいと思っているそうです。

【効果があった活動例】

1. 雰囲気づくり(指示を促す歌やチャンツ)

例1) ♪ Shhh, Be quiet. Please sit down. Please sit down. Please sit down. Listen, listen, listen.

この歌は、絵本を読む前にうたうそうです。歌うことで、次の活動への心構えができて、スムーズに活動に入れるのだそうです。(ロンドン橋のリズム)

例2) ♪ Open your book. Open your book. Open your books to page 25.

ここでのポイントは、25 を一回しか言わないこと。子どもたちはそのあとのページ数を集中して聞くようになるそうです。他のことをやっている児童も最後は聞きます！

2. 活動内容

例) Action Song: ♪ The Alphabet Song

ABC の歌を使って、それぞれのアルファベットの形に着目させる活動です。アルファベットの形の特徴に合わせて、メロディーに乗せて表現します。手を動かす、体を動かす、色を塗る、星をつけるなど、たくさんの活動ができます。

今回の題名でもある「slow but sure」にあるように、一人ひとりの成長に合わせて、急ぐのではなく、小さいことを積み重ねることで、確実な力をつけていくことが大切であるとおっしゃっていました。

(4) 小学校英語活動で本当に大切なこと

昭和女子大学附属昭和小学校校長／昭和女子大学・大学院 講師 小泉清裕先生

小泉先生には、幼稚園から大学院までの英語教授経験をもとに、小学校英語活動についてお話をいただきました。終始笑いと発見が絶えないあつという間の充実した一時間でした。



【英語教育を捉えなおす】

小学校で一度も教えたことも、習ったこともない中で、小学校英語教育に携わるようになった経験は、現在、多くの先生が通っている同じ道。小学校で英語を教え始めてからの苦労話や、「英語を教える」「言葉を育てる」ということはどういうことなのか、という原点・出発点から英語教育を考え始めることの重要性を話していただきました。

英語学習の目的と目標の違いを、登山をたとえて話され、目的は頂上に立つことであり、途中にいくつかの山小屋があり、それは目標であると話されました。日本人の多くは、途中にある山小屋の高校入試や大学入試を目的としまっているため、そこまで行きつくと、頂上をめざすことなく、下山を始めてしまっていることを指摘されました。言葉の学習の目的は「言葉をつかえるようになること」であり、高校入試や大学入試ではないことを強調されていました。入試に向けてのルートは、一番垂直で、余裕のないかなりきついルートであるため、楽しみを感じないことが最大の欠点であると話されました。

英語教育のすそ野にあたる小学校英語活動には多くのルートがあるべきであり、そのルートの開発が求められているが、教師自身がそれらのルートを登る体験をしてこなかったために、小学生にふさわしい新しいルートを作りだすことに苦労している、という小泉先生のお言葉が印象的でした。

また、日本では文盲率は非常に低く、国民の教育レベルが非常に高いことを示しながら、過去の教育では知識の量を増やすことが重要であったが、IT化が急速に進むこれからの時代では、今までとは異なる新しい教育が求められていることを指摘されました。小学校教育では、小学生がいずれ社会で活躍する、今から20年後に求められる力を授けられる教育を考える必要があると話されました。その上で小学校の英語活動をどう行えばいいのか、ということをもとめてくださいました。

【言葉の学習の大切な流れ】

「知らない言葉」を「つかえる言葉」にすることが言語教育の目的であるが、「知らない言葉」が一気に「つかえる言葉」になるのではなく、その前に、「知っている言葉」を増やす必要があり、さらにその前に「聞いたことのある言葉」を増やすことが重要であるとし、小学校英語活動では、「つかえる言葉」にするための第一歩として、「聞いたことのある言葉」を増やすことをめざす活動の重要性を説かれていました。

「聞いたことのある言葉」が、「知っている言葉」になり、しだいに「つかえる言葉」に育っていくことを教師が理解すること。そのために、小学校英語教育の中では、「汎用性のある言葉」を聞く活動をすべきであること。言葉は「意味」を伝えるための道具であるので、言葉の「形」ではなく、「意味」が生きる活動にすべきであること。言葉の発達には、語 (word) から句 (phrase)、文 (sentence)、文章 (sentences) へと進歩すること。従って、唐突に文を覚えさせるのではなく、先生が文で話しかけ、子どもが語で応えるような interaction が起こるような仕組みを作っていくことが大切であるというお話をいただきました。

閉会後の懇親会にて活発な意見交換会が行われました。

次の開催は秋以降にHPを参照

HP : <http://www.h2.dion.ne.jp/~azalea/ChibaTEC.htm>

問い合わせ：ちばてっく (JES千葉支部)

〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33

千葉大学教育学部英語科 E-mail: chiba.u.eigo@gmail.com

TEL : 043-290-2678(本田勝久研究室)

